

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Vertical Control : Some Problems on the Exploitation of the Environment in the Central Andean Highlands

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大貫, 良夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004567">https://doi.org/10.15021/00004567</a>

## アンデス高地の環境利用

— 垂直統御をめぐる問題 —

大 貫 良 夫\*

Vertical Control: Some Problems on the Exploitation of the Environment  
in the Central Andean Highlands.

Yoshio ONUKI

Murra's study, published in 1972, on the nature of environmental exploitation among the Central Andean highlanders has elicited considerable interest in the cultural ecology of the Andes in an attempt to clarify the notion of "vertical control". This article (1) outlines the classification of natural or ecological zones most relevant to human life; (2) considers several cases of "vertical control"; (3) analyzes, in a historical perspective, some tentative types of environmental exploitation; and (4) indicates some problems for future study.

Although more individual case studies are needed for a precise discussion, Brush has postulated three types for "vertical control", or "the manifold exploitation of multiple ecological zones", of the Andean Highlands. It is suggested here that a fourth type, "the specialized type", may exist. In this type at least two different ethnic groups occupy different ecological zones, each devoting themselves to the exploitation of natural resources of their particular zone of occupancy and exchanging specialized products.

It should also be noted, that the four types, together with others which may exist, are the products of historical conditions as well as local circumstances, as is illustrated by the case of the Chaupiwara, or the Huaris and the Llacuaces. However, it seems generally apparent that in the Central Andes there first existed the compressed type of exploitation, whereby each household sought to maintain economic self-sufficiency, and that later when this became impossible, it was replaced by economic self-sufficiency

---

\* 東京大学教養学部・国立民族学博物館展示企画委員

on the community level, and a variety of exploitative types appeared. Where even this was difficult or impossible the specialized type was favored.

Apart from the accumulation of precise data on individual cases, some of the tasks remaining are to clarify the local and historical situations that caused a shift from one type to another, and to relate types of vertical control to various aspects or specific features of a given society and culture. It is also of great significance to relate such kinds of economic behavior to a people's system of symbols or cosmology, for the historical and present day basic unity of the cultures of the Central Andes may depend on the sharing of the essential nature of the system of symbols.

1. はじめに	(1) 異民族間の交換
2. アンデス高地の自然区分	(2) ワリとリャクワス
3. 垂直統御——Murra の垂直列島論——	(3) チャウピワランガ
4. 垂直統御——現代の事例——	6. 問題と考察
(1) ケーロ	(1) 垂直統御の古さ
(2) ウチュクマルカ	(2) 垂直統御の一般性と特殊性
(3) 垂直統御の類型	(3) 垂直統御の背景
5. 垂直統御——歴史的側面——	

## 1. はじめに

中央アンデスの高地は、急峻な山と深い谷の錯綜するところで、そこでは南北とか東西といった水平方向ではなく、むしろ高低の差によって自然の条件が著しいちがいを示している。中央アンデスにおける人間の生活領域は、海拔およそ 5,000 メートルから 1,000 メートルまでの範囲である。高度による自然条件の差異は、それに応じた生業資源の差異を生んでおり、高地の人びとはその差異を効果的に利用する生活様式を作りあげてきた。アンデス高地の文化生態学は、この高度により異なる自然資源の活用という側面を指摘した Murra の研究論文 [MURRA 1972] 以降、少なからぬ関心をよぶようになった。本論は、(1) アンデス高地の自然を人間生活との関連から区分する、その区分法を概説し、(2) Murra の考え方と、それ以後の研究によって明らかになりつつある、アンデス高地の環境利用の諸事例を検討し、(3) 環境利用のいくつかの類型に歴史的観点からの分析を加え、(4) 今後の研究方向や問題点を抽出する

こと、を試みたものである。

## 2. アンデス高地の自然区分

アンデス高地の自然区分については、いろいろな試みがなされてきたが、文化との関連でよく用いられるのは、Tosiの区分法 [Tosi 1960] と Pulgar Vidal の区分法 [PULGAR VIDAL 1946] である。特に後者は、文化と自然をくみあわせた区分法ともいえるもので、アンデスの住民の使用している用語をとりいれている。その区分法は、第1表に示す通りである。なお、標高については、地方により300メートルく

表1 中央アンデス高地の自然区分

海 抜	名 称	主 たる 特 徴
5000 m	プーナ (Puna)	広大な草原。寒冷。降雨 500 mm 以上。 作物：キノア ( <i>Chenopodium quinoa</i> ), ジャガイモ ( <i>Solanum</i> sp.) ほか。 家畜：リャマ ( <i>Lama glama glama</i> ), アルパカ ( <i>Lama pacos</i> ), ヒツジ。
4100 m	ハルカ またはスーニ (Jalca, Suni)	なだらかな草地。山の斜面上部。やや寒冷。 降雨 約 500 mm。 作物：ジャガイモ、キノア、 オユコ ( <i>Ullucus tuberosus</i> ), オカ ( <i>Oxalis tuberosa</i> )。
3500 m	キチュワ (Kichwa, Quechua)	山の斜面。温暖。降雨 250-500 mm。 トウモロコシ ( <i>Zea mais</i> ), アラカチャ ( <i>Arracacia xanthorrhiza</i> ), マメ類 ( <i>Phaseolus</i> sp.), オオムギ、コムギ、ソラマメ。
2300 m	ユンガ (Yunga)	山の斜面下部。狭い谷底。降雨 250 mm。温暖、乾燥。 トウモロコシ、マメ類、サトウキビ、ピーナツ、 サツマイモ ( <i>Ipomea batatas</i> ), マニオク ( <i>Manihot esculenta</i> ), 果樹—柑橘類、アボカド ( <i>Persea americana</i> ), チリモヤ ( <i>Annona muricata</i> ), グァバ ( <i>Psidium guayava</i> )。 棉 ( <i>Gossipium barbadense</i> ), ココ ( <i>Erythroxylon coca</i> ), トウガラシ ( <i>Capsicum</i> sp.)。
1000 m		

らの異同がある。また、名称とその意味するところも、地方により若干の異同があるので、個々のモノグラフを読むときには注意しなければならない。

アンデス高地の自然は、ユンガ (Yunga)、キチュワ (Kichwa)、ハルカ (Jalca)、プーナ (Puna) の区分帯に分類することができる。ユンガとは、海拔1,000メートル付近から、2,300ないし2,500メートルぐらいまでのあいだに位置する土地で、地形的には谷底とか山の斜面下部に見出される。年間の降雨量は250ミリ以下で、乾燥が強く、気温も高く、0°C以下にはならない。サボテン、リュウゼツランなど乾燥に強い植物が多いが、適当な水を与えるならば作物は何でもできるとまでいえるほど気候の良好なところである。トウモロコシ、マメ類、カボチャ、トウガラシなど、アンデスの主要作物のほか、サツマイモ、ピーナツ、ユカ (マニオク) も栽培可能で、そのほかアボカド、グァバ、パカエ (*Inga feuillei*)、チリモヤ、パパイヤ、バナナなどの果樹もよく育つ。現在では、オレンジ、グレープ・フルーツ、サトウキビがさかんに作られている。また、ココヤ棉も育つ。

キチュワ地帯は、ケチュアとかキシユワともよばれ、海拔2,500メートルから3,500メートルぐらいのところ、山の斜面や谷の上流部にひろがる。ユンガ地帯の谷間に比べて、上流部の谷間はかなり広い盆地状となり、山の斜面は傾斜のゆるいひろがりとなる。年間雨量は250ミリから500ミリぐらいに増加する。トウモロコシ、アラカチャ (*Arracacia* sp. のイモ)、それにオオムギ、コムギ、ジャガイモなどが作られるが、ユンガ地帯の果樹をはじめ、サツマイモ、ユカ、ココ、棉などは育たない。しかしながらユンガに比べて土地は広大で、トウモロコシやジャガイモの生産量は大きく、今日のペルー高地の人口集中地は、ほとんどこのキチュワ地帯に見出される。

ハルカはスーニ (Suní) とよばれ、山の斜面上部、谷の源流部などにまたがり、海拔3,500メートルから4,100メートルぐらいに位置し、雨量は500ミリほどと多くなるが、高度のせいで、かなり寒いところとなる。トウモロコシの栽培はできなくなり、かわってジャガイモ、オユコ、オカ、キノアなどが主作物となる。

プーナは海拔4,000メートル以上のところにひろがるなだらかな草原で、ハルカの作物が栽培されることもあるが、リヤマやアルパカの飼育がさかんなところで、16世紀以後はヒツジも飼われるようになった。

### 3. 垂直統御——Murra の垂直列島論——

ユンガからプーナまで、標高差にして4,000メートル以上のへだたりのなかに分布する自然区分帯は、それぞれに特有な自然資源をもつ。アンデス高地の人は、それらの自然資源のすべてをできる限り利用して、自給度の高い生活を確立しようとつとめてきた。このような環境利用の形態を Murra は「垂直統御」(vertical control) とよび、少なくともインカ時代にアンデス各地に存在し、しかもそれは、「垂直列島」(vertical archipelago) の形をとると述べた [MURRA 1972]。それについて、Murra の事例を2例紹介する。

今日のワヌコ市 (Huánuco) のあるワリャガ川 (Río Huallaga) 上流の一带には、16世紀において、チュパチュ (Chupachu), ヤチャ (Yacha), ケーロ (Quero), ヤル (Yaru), などの民族 (エスニック・グループ) が分布していた。各グループの人口は、18,000~20,000人ぐらいで、小さな集落をいくつも作って住んでいた。この地方に、1562年、スペイン国王の命を受けて、Iñigo Ortiz de Zúñiga という役人が現地調査 (Visita というもので、植民地行政に利するための実情調査。Visita 全般については、[増田 1967] を参照) に訪れたが、Murra の努力によってその報告書が公刊された

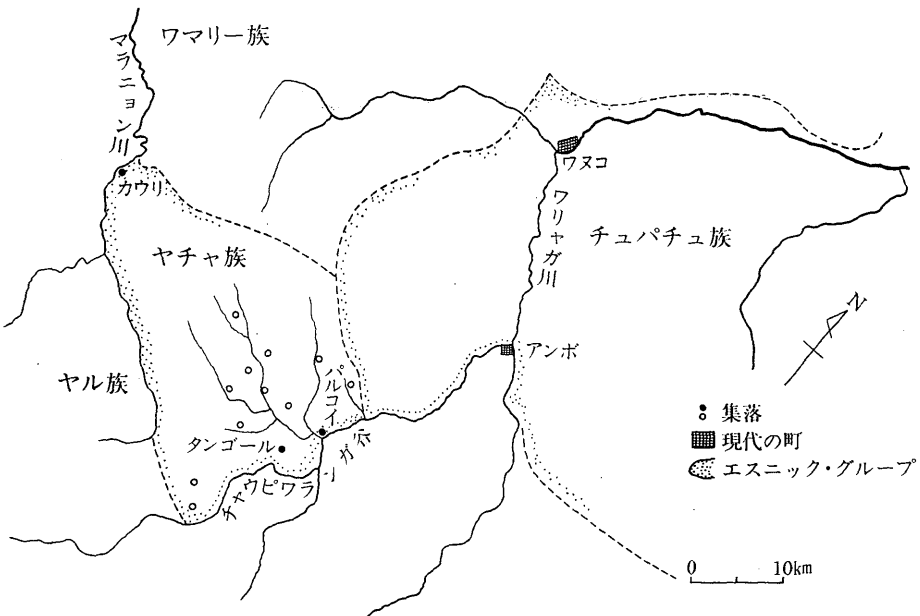


図1 ワヌコ盆地概略図  
Ortiz de Zúñiga [1967 附録地図 (R. Bird 製作)] より

[ORTIZ DE ZÚÑIGA 1967, 1972]。

そこに出てくるワリャガ上流部の住民は、川を見下ろす山の中腹に集落を構えていたが、そこは先の自然区分法でいうハルカとキチュワであった。そして集落の上下に畑をもって、畑の往復は1日で十分足りた。もっとも、ハルカ地帯の上方にも畑が入りこむことがあり、その場合は、往復に3～4日かかることもあった。ハルカではジャガイモ、キチュワではトウモロコシが主作物であった。

人びとはさらに上方のプーナ地帯と、下方のユンガ地帯も利用していた。プーナでは家畜の飼育や塩とりが行われ、ユンガやその下にひろがる森林地帯は、暖地産の作物(棉とかココ)や、野生資源(ハチミツとか木材)の入手のために利用された。プーナやユンガは、集落から比較的遠く、片道3～4日を要するが、そこでの活動は3～4家族単位で営まれ、本拠地の集落とはつねに密接な連絡を保ち、働き先で死亡その他の事故があると、本拠地から交替や補充の要員が出かけていった。

興味深い点は、プーナとかユンガの地帯は、異なるエスニック・グループの利用するところだったということである。つまり、ヤチャもチュパチュも同じところで家畜を飼い、塩をとり、棉を植え、木材をとっていたのである。

以上を要約して、Murra はつぎのような図(図2)を描いている[MURRA 1975: 65]。

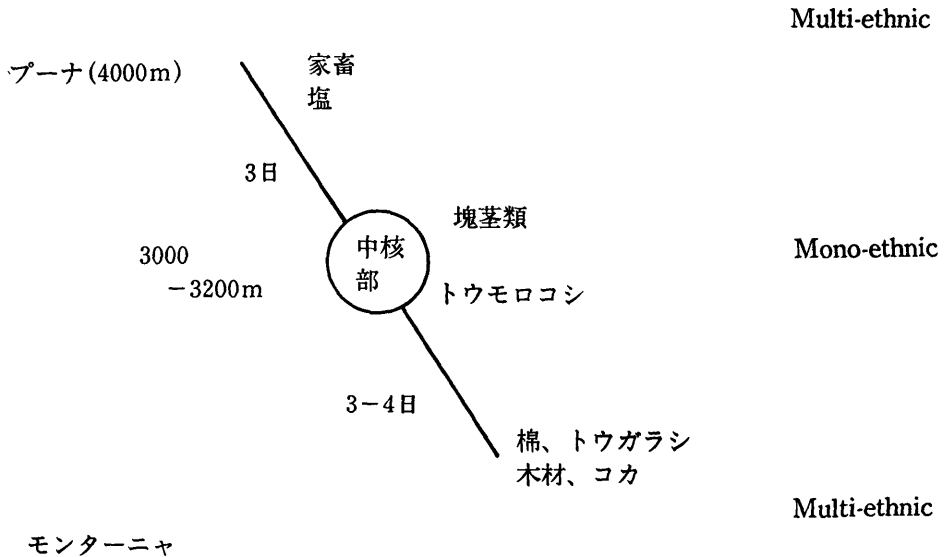


図2 チュパチュ族の垂直統御(16世紀)  
Murra [1972: 433] より

ワヌコの場合と同じ原則であるが、もっと規模の大きい例を、Murra はチチカカ湖岸のルパカ族 (Lupaqa) に見出す。それは1567年の Garci Diez de San Miguel の Visita の記録に基く。

ルパカ族は、チチカカ湖西岸のチュクイト (Chucuito) からセピータ (Zepita) までのおよそ 100 キロメートルの範囲を占め、16世紀後半の人口は10万から15万人という、大きな民族であった。チチカカ湖西岸は海拔 3,800 メートルより高く、その周囲の土地はプーナという自然区分帯に入る。そこではジャガイモ、キノアなどの農耕、湖での漁、そして草原でのリヤマとアルパカの飼育、が行われていた。

ルパカ族はこのほかに、西方の太平洋側の低地と、チチカカ湖東方の低地にも土地をもち、かなり多くの住民がそこで農耕を営んでいた。太平洋側では、イロ (Ilo), モケグア (Moquegua), サマ (Sama, Zama), アリカ (Arica) などの谷間が利用され、チュクイトからは片道10日以上もかかる遠いところであった。ここでは、トムロコシや棉を栽培するほか、海鳥の糞 (グァノ) を肥料用に採取していた。一方、東部の低地は、ラレカハ (Larecaja) とか、ボリビアのコチャバンバ (Cochabamba) 南方のことで、チチカカ湖から100~400キロメートルもはなれている。トムロコシとコカを栽培し、また木材も入手した。これらの低地には、西側も東側も、ルパカ族以外の人がやってきて、やはり暖地産の作物を栽培したり、野生資源の入手を行っていた。ルパカ族の場合を図示すると第3図のようになる [Murra 1975: 77]。

こうして Murra は、アンデス高地の経済の基本は、高度により異なる自然資源を最大限に活用することにあり、各民族あるいは各集落 (共同体) が、いろいろな自然

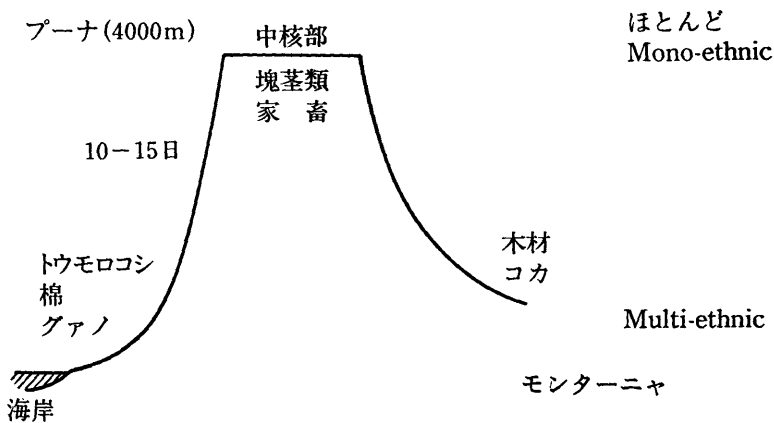


図3 ルパカ族の垂直統御 (16世紀)  
Murra [1972: 441] より



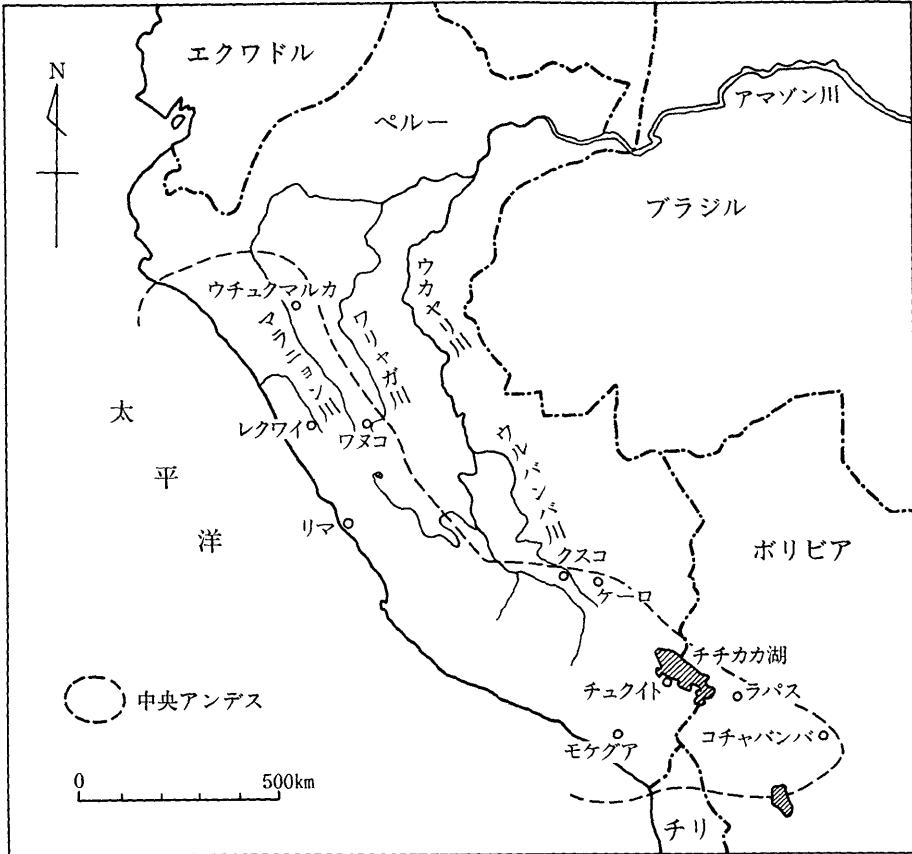


図4 中央アンデス概念図

区分帯に人員を送って、資源の入手につとめていた、そしてそれは、生態学的環境が垂直に分布する列島のごとき形であり、アンデス高地の環境利用の形態を「垂直列島」とよべる、と結論する。

#### 4. 垂直統御——現代の事例——

Murra の研究が刺激となって、アンデス高地の垂直統御という観点からする民族誌的研究が最近増加してきている。そこで、現代のアンデス高地の垂直統御の事例をみてみよう。

(1) ケーロ

第1の例は、南高地クスコ県のケーロ (Q'ero) の場合で、Webster の研究に基づく [WEBSTER 1971]。

ケーロは、クスコの東方約90キロメートルのところにある谷間を占め、人口およそ350人のグループで、12の集落に分かれて住む。そのなかで中核となる集落がケーロで、海拔3,400メートルのところにあるが、ここに人びとが集まるのは1年の内のごく短期間で、通常は海拔4,000~4,300メートルのところに分散する小さな集落に住む。

ケーロは、ケチュア語を話し、言語や諸慣習の点で、クスコ県の他のインディオとほとんど変るところがなく、いわゆるケチュア族に入るといってよいが、ケーロ内部での社会的経済的相互依存の度合と内婚率が非常に高く、隣接する同じようなグループ (行政上 comunidad という単位) とは画然とした区別を自他ともに認めており、日常生活の場においては社会的・経済的・宗教的にほとんど自己完結的な社会とみてよく、その意味で、16世紀のワスコのチュパチュとかヤチャと同じような、ひとつのエスニック・グループと似た性格をもっている。

さて、ケーロの生活において利用される自然区分帯は、表2の通りである。

ケーロ各人の経済において、家畜、ジャガイモ、トウモロコシは、不可欠の要素である。アルパカは、毛と肉の利用価値のほかに、富のシンボルとしても重要である。毛は上質の織物や、外部との交易用となる。リャマは自分たちのための織物や肉のためという用途のほかに、駄獣としての役割が大きい。アルパカより丈夫で、低いとこ

表2 ケーロの自然区分

標高	自然区分	特徴・作物・資源
4600 m	プーナ	草地, 湿地。リャマ, アルパカの飼育。 下半部に集落が散在。
4000 m		
3800 m	ハルカ	ジャガイモ, 特にチューニョ用ジャガイモ。
3400 m		ジャガイモ, オカ, lisa, anu など塊茎類。 ケーロの中核村は, この下限に位置する。
2400 m	キチュワ	急峻な斜面で, ほとんど利用できない。
2000 m	ユンガ	トウモロコシ, カボチャ, マニオク ほか。
		ジャングル。ほとんど利用しない。

ろでも使えるので重宝である。ジャガイモは主食で、食事の80パーセントを占めるといふ。冷凍乾燥してチューニョやモラーヤ (moraya) としたものをたくさん作り、日常の食事とか、外部との交易用に使う<sup>1)</sup>。トウモロコシは食用のほかに、チチャという酒を作る上で不可欠である。

これらの産物を入手する経済活動において、ケーロでは、すべての世帯が、高いところから低いところまでを往復して1年をすごしている。そこには、労働と人員動員のスケジュールが確立している。アルパカの飼育は女や子供が高いところで行い、ジャガイモとトウモロコシの畑作りは男が行う。そして低いところに植えたトウモロコシの収穫のときになると、ほとんど全員が約1カ月間低地へ移動して仕事をする。その間の家畜の世話は、集落の長にゆだねられる。

ケーロの土地には小さな谷が4本あり、そこに人びとは分散して住む。ケーロ内での内婚率は80パーセント以上であるが、ひとつの谷のなかでの内婚率は50パーセント以下になる。すなわち、4本の谷のあいだで婚姻が成立する場合の方が多い。また、人びとは、自分の家屋敷のある谷間以外の、他の3本の谷にも、土地、家屋、家畜を所有する権利を保有しており、必要が生ずると、べつの谷の方に畑を作ったり、家を建てたりすることができる。こうして、谷間相互のあいだには、婚姻とか権利の網がかぶり、相互に密接なつながりができており、それを通しての相互的労働提供の慣習も発達している。

こうして、ケーロは、経済的社会的にほとんど独立した形で、自給自足の生活を営んでいる。外部から入ってくるものは、コカ、塩、砂糖、石油、パン、染料などで、いずれも必要最低限の量でしかなく、しかもそれらは外部の人間がときおり持ちこんでくるだけで、ケーロの人が町などへ出かけて行って買うのではない。ケーロから出すものは、アルパカの毛、上等の毛織物、ジャガイモ、チューニョである。また、経済面での世帯別分業はなく、どの世帯も、あらゆる仕事をする事になっている。若干の品物の出入りはあるが、ケーロは、比較的狭い範囲の土地で高度差を利用して、世帯単位で、極めて高い自給度を達成しているといえる。

## (2) ウチュクマルカ

第2の例は、北高地のマラニョン川 (Río Marañón) 東部ウチュクマルカ (Uchucmarca) で、Brush の研究に拠る [BRUSH 1974, 1977]。

ウチュクマルカの村は、海拔3,500メートルのところの位置するが、村人の利用す

1) ジャガイモのこのすばらしい加工法については、山本のくわしい報告がある [山本 1976]。

表3 ウチュクマルカの自然区分

自然区分	住民による区分	特徴・作物・資源	
プーナ	Jalca fuerte	冷涼。多雨。なだらかな草地。 家畜（ウシ、ヒツジ）。	4000 m
ハルカ	Jalca	冷涼。灌木と草地。ジャガイモ、 オカ、マッシュワ、オユコ、 ハウチワマメ、ソラマメ、オオムギ。	3500 m
キチュワ	Templada	温暖。適度の雨。トウモロコシ、 オオムギ、コムギ、ジャガイモ、 スズメノエンドウ。	3000 m ウチュクマルカ
	Kichwa	温暖。適度の雨。 トウモロコシ、マメ、 カボチャ、チリモヤ、 マゲイ、コムギ。	2500 m montaña 狩猟 木材
	Kichwa fuerte	温暖、乾燥。 コムギ、トウモロコシ、薪用雑木。	2000 m
ユンガ	Temple	暑く、乾燥。かんがい。 サトウキビ、ココ、 トウモロコシ、柑橘類、 バナナ、マニオク、 トウガラシ、カカオ。	1500 m
		1000 m	

Brush [1974, 1977] より

る土地は海拔800メートルから4,300メートルの範囲にわたり、さらにマラニョン川とワリャガ川の分水嶺を越えて、その東斜面上部の森林地帯も利用されている。

村人は、急斜面に階段状に連なる形で、土地をつぎのように区分けする（表3）。

これに見るように、ウチュクマルカでも、高いところから低いところまで、それぞれの場所に適した作物や資源を入手して、自給性の高い生活をうちたてている。ただ、ケーロの場合は世帯ごとの自給性であったのに対し、ウチュクマルカでは、コミュニティとしての自給性を維持しようとする。すなわち、ウチュクマルカでは、所有する土地の位置や大きさが、世帯によって異なり、すべての世帯がそれぞれに高所から低地にわたって土地を分散して所有するとは限らない。そこで人びとは、産物を村内に流通させることによって、コミュニティとしての自給性を確保するのである。

自給性確保のメカニズムは、交換である。ウチュクマルカでは、この交換には、労働の交換、土地の交換使用、物の交換がある。土地所有者は、余分の土地のあるとき、

パートナーを募り、その土地や牛、種子をパートナーに提供する。パートナーはそれらを用いて働き、収穫物の分け前を入手する。そのほかいろいろな労働交換が世帯間で行われるが、労働には労働をもって返すというよりも、産物で支払う場合が多い。また、物と物との交換も頻繁である。この場合、交換のレートが慣習的に定まっているらしいが、それは当事者間の無言かつ自明の約束ごととなっていて、第三者には知ることがむずかしい。交換のときには、品物を布やポンチョに包んでもち運び、何をどれだけもってゆき、何を受けとったのか、ほとんどわからないという。

ウチュクマルカは、かくして、貨幣の入りこむ必要のない経済を営むが、最近はしだいに貨幣による交換も行われた。近くに自動車道路が建設され、道路の末端に小さな町ができ、商人が進出してきて、ウチュクマルカを商品経済のなかへ少しずつひきこみだしたのである。それでも、村内では依然伝統的な交換が根強く存続している。そのレートは、貨幣価値に直すと不釣合な場合が多いらしい。それでも人びとは、交換の価値にはべつの尺度があると考えている。それは、後述するように、ワヌコ近郊のインディオ農民のあいだにみられる考え方と同じである。

### (3) 垂直統御の類型

Brush は、ウチュクマルカの研究から出発して、それまでに知られているいくつかの事例を比較し、アンデス高地の垂直統御には、少なくとも3つの類型があると考えられる [BRUSH 1977: 10-16]。

第1は圧縮型 (Compressed type) である。ウチュクマルカやケーロがこのタイプに入る。そこでは、土地の傾斜が急で、自然区分帯が相接して連続的に分布する。そして、その分布の両端の距離が比較的小さい。ウチュクマルカの場合、端から端までは徒歩2～3日の距離である。集落はこの両端のほぼ中間に位置していて、どちらの端にもおよそ1日あればゆきつくことができる。そして村人は、つねに上下に動きながら、生産活動に従事する。

第2のタイプは列島型 (Archipelago type) で、利用する土地が遠くはなればなれになっていて、それを利用するには本村をある期間留守にすることが必要となる。インカ時代から16世紀にかけてのルパカ族がその例で、少し規模は小さいが、チュパチュ族も同様である。このタイプの民族誌的事例はくわしい報告がない。それでもBrush は、ワヌコ県に現在でもいくつかの例が実際にみられるという。たとえばマラニョン川流域のラパヤン (Rapayán) とかタヤバンバ (Tayabamba) では、ワリャガ川流域の森林地帯に7～10日の旅をして畑作を行うという [BRUSH 1974: 293]。

第3のタイプは拡散型 (Extended type) である。広い谷間で、自然区分帯が連続的に分布し、そのなかに集落が点在し、経済的には集落間分業の傾向が強く、複雑な交換の網を通して、産物が谷間全体にゆきわたる。クスコのそばのビルカノタ (Vilcanota) 谷がこれにあたる。海拔3,500メートルから1,000メートルの範囲に分布するいくつもの集落は、それぞれの土地に適応した作物の生産に90パーセント以上の労働と時間をあて、市 (マーケット) を通して他の集落の産物を入手する。コムギだけ、ジャガイモだけ、あるいはタマネギだけを作る専業村も、それぞれ3村くらいずつ見出される。

アンデス高地の環境利用の形は、Murra の垂直列島論を契機として、研究上の関心事になったが、類型論を試みたのは Brush が最初であろう。それはごく新しいことで、したがってまだ事例数が少ない。やはり事例を多くしてはじめて、類型論は充実した内容を備えてゆくものであろう。

ところで、現代の諸類型は、歴史の所産でもある。歴史的背景を知ることは、アンデス高地の場合、史料が不十分で至難の業であるが、つぎに、北高地南部の事例について、垂直統御の歴史的側面を垣間見ることにする。

## 5. 垂直統御——歴史的側面——

### (1) 異民族間の交換

これまでのいくつかの例を見る限り、アンデス高地では、世帯ごともしくはコミュニティごとの自給性が非常に高く、異なるエスニック・グループ間の交換もしくは交易が成立しにくくみえる。

しかしながら、アンデスで異民族間の交換がなかったかという、必ずしもそうではない。16世紀当時においても、ワヌコ地方の記録その他から、交換を暗示する記述が目につくのである。Murra の依拠したワヌコ地方の Visita の記録にも、それは記されている。この Visita では、あらかじめいくつもの調査項目が列挙されているが、その第18番目の項目について、チュパチュ族やヤチャ族の人びとが答えているところを見てみよう。

その第18項とは、おおよつぎのような調査指示である。すなわち、インディオ間の取引、商売、収益を調査し、インディオの生活、健康に過不足するところがないか、家畜飼育に過不足するところがないか、何を作り、1年間にどのくらい生産し、

単位面積あたりどのくらいの収益をあげるのか、各村ごとに調べよ、というのである [ORTIZ DE ZÚÑIGA 1967: 15]。

これに対して、チュパチュのひとりはずぎのように答える。

……近くには、チンチャイコチャ、ヤロ、ワマリーその他のインディオが住んでいて、彼等とは取引がある。彼等はヒツジ（リヤマやアルパカのこと）、毛、塩、乾肉をもってやってくる。こちらからは、それとひきかえに、トウモロコシ、棉、ココカ、トウガラシなどを与える。ときどきは、こちらから彼等の土地へ取引にでかけることもある……[ORTIZ DE ZÚÑIGA 1967: 63]。

このチンチャイコチャ、ヤロ（またはヤル）、ワマリーなどのグループは、ワリャガおよびマラニョンの両河川の源頭部の高原に住む民族といてよく、ワスコ盆地のヤチャやチュパチュとは異なるエスニック・グループである。

チュパチュたちは、高いところに土地や家畜をもつと記されていると同時に、こういう異民族間の交換も行っていたのである。そのことは、先に引用した例のみならず、第18番目の質問に対する、多くのインディオの答えのなかに見出すことができる。

## (2) ワリとリャクワス

ワスコの記録に登場するヤロ族については、べつの研究が興味深い示唆を与えてくれる。それは、マラニョン源頭から、アンデス山脈西斜面上方のカハタンボ (Cajatambo) にかけての地方の、17世紀の伝承に関する Duviols の研究である [DuvIOLS 1973]。

伝承によると、16世紀においてそこにはワリ (Huari) とリャクワス (Llacuaz) の2グループが住んでいた。ワリ族は、起源神話によると、ワリという同名の神によって、灌漑、畑、作物を与えられ、その神の教えに従って農耕を営む人びとで、もともとは暖かい低い土地から移り住んできたという。文化英雄としての神ワリは、トウモロコシの女神の夫として考えられ、農耕の祭りには、クイ (テンジクネズミ) を屠り、この神に捧げた。ワリ族のもっとも重要な祭りは、耕作・播種の祭りと、収穫の祭りで、そのほか天候不順のときの祭りや、灌漑水路の清掃のときの祭りもあった。

一方リャクワス族は、プーナに住み、リヤマやシカの肉を食べて暮すといわれる人びとで、ワリ族からはまったくべつの異民族と考えられている。神話では、リャクワス族の祖先は雷の子であるとされる。その雷の子は、ヤロ、ヤロ・チチカカ、ヤロカ

カなどよばれる場所に落ちた雷によって、地上にもたらされた。リャクワス族の儀礼のなかでは、雷に対するものももっとも重要であり、雷光の神殿には平石を置き、その上でリャマを屠り、心臓と肺をとり出した。肺には息を吹きこんでふくらませ、占いをした。

リャクワス族の神話上の祖先の出生地にはヤロという名が冠せられており、ワヌコ地方の16世紀の記録に登場するヤロ族の分布は、マラニョン川源頭の高原である。またべつの文書記録によると、この地方にはヤロビルカという国があって、インカ帝国に抵抗する強国であったという [GUAMAN POMA 1956: 47]。これらのことから、Duviols は、リャクワス族とヤロ族は、同じ民族か、極めて近い関係にあるもの、と考える。

さて、このリャクワス族とワリ族の関係はどうであったか。17世紀の文書によると、レクワイ (Recuay) の近くのプーナに、リャクワス族がいて、毛、皮、肉、乳、糞 (すべてラクダ科動物) をもって、下方の農耕民の生産するトゥモロコシ、トウガラシ、ココなどと交換していたという。またカハタンボでは、毎年7月から8月頃、すなわちトゥモロコシの収穫期になると、リャクワス族が山から下りてきて、100キロのトゥモロコシとヒツジ1頭とを交換し、5月のジャガイモの収穫期には、ジャガイモと家畜を交換したという。オトゥーコ (Otuco) では、両者の関係が必ずしも友好的とは限らなかったようである。たとえばワンコ (Guanco) 村では、貧しい土地をリャクワス族に与えて共存を図り、マンガス (Mangas) 村では、追い払ってしまい、オトゥーコ村では、産物交換の申出を拒絶して戦争となり、逆にリャクワス族に征服され、皆殺しにされてしまった。

17世紀には、スペイン人の植民地政策のために、集中居住 (reducción) が強化され、いくつもの村で、ワリ族とリャクワス族が混住する結果となった。そのような村での生業活動のくわしいことは不明だが、ワリ族は農業だけに従事し、リャクワス族は農業と牧畜の両方を営んだらしい。また、リャクワス族をまじえた村は、海拔3,200メートル以下のところには見出されず、リャクワス族の高所志向は根強かったようである。

以上のような Duviols の研究からは、少なくともアンデス高地の一部において、上と下の生態学的ゾーン (自然区分帯) に、べつべつの民族がいて、相互に産物を交換しあうシステムがあったと推測できる。そしてそれが、スペイン人の植民地政策の進展とともに、ひとつの集落を構成して住むようになった結果、ひとつの集落の住民が上と下の土地を利用する圧縮型もしくは小規模な列島型の垂直統御の形態を、外見



上は、とるように変化した、そういうプロセスが予想できるのである。

(3) チャウピワランガ

ワヌコ盆地の Visita の記録の研究は、同時に考古学的調査や民族誌的調査も含んでいた。そして特に、16世紀のヤチャ族の分布領域であったチャウピワランガ (Chau-piwaranga) 谷で、民族誌的研究が進められた。この谷間には10余の集落があるが、いずれの住民もチャウピワランガの民という帰属意識が強く、1960年代の住民は、16世紀のヤチャ族につながると考えてよい。

チャウピワランガでの自然区分と土地利用の形態は、表4のようにまとめられている [FONSECA MARTEL 1972: 319]。

1960年代においては、チャウピワランガの大部分は、キチュワ地帯だけを直接利用し、あとの地帯の産物は、交換とか購入によって入手するようになっていた。それでもキチュワ地帯自体の高度差を利用して、ジャガイモ、マメ、トウモロコシなどを作

表4 チャウピワランガの自然区分

自然区分	集落ほか	住民による区分		作物
プーナ	牧場	ハトゥン・ハルカ (Jatun-Jalka)		ジャガイモ 5品種
ハルカ	Cauri (3700 m)	ハルカ		ジャガイモ 20品種, オカ, オユコ, マシュワ (Tropaeolum tuberosum), オオムギ, 薬草
キチュワ	チンチュ (3700 m)	ハルカ	ハルカ・パパ (Jalca-papa)	ジャガイモ 50品種, オカ, オユコ, マシュワ, オオムギ, ソラマメ
			キチュワ・パパ (Kichwa-papa)	ジャガイモ 10品種, ソラマメ, キノア, オオムギ, タウリ (tauri)
	ヤカン (3667 m)	マルカ (集落)		野菜, 香料植物
	タンゴールバルコイ (2500 m)	キチュワ	ハルカ・ハラ (Jalca-jara)	トウモロコシ, コムギ, エンドウマメ
キチュワ・ハラ (Kichwa-jara)			トウモロコシ, マメ, ヒョウタン, カイワ (caiwa), クラウ (curau)	
ユンガ	農園 (1500 m)			トウモロコシ, マメ, カボチャ, 果樹, サトウキビ ほか

Fonseca Martel [1972] より

っており、すでに自給性の維持はできなくなったものの、垂直統御の縮小された形がみられる。

16世紀のチャウピワランガ谷一带は、ヤチャ族の住むところで、16世紀前半においては、チュパチュ族と同様、プーナからユンガ、そしてその下方の森林地帯までを利用し、一部高所のヤロ族やワマリー族などと交易を行っていた [ORTIZ DE ZÚÑIGA 1972: 72f]。

インカ帝国滅亡後、ワヌコ盆地にはスペイン人が入りこんで、土地やインディオを事実上私有化した。16世紀後半のスペイン人がまず私有化していった土地は、ワヌコ盆地の平地であるユンガ地帯と、マラニョン川源頭のハルカからプーナの地帯であった。ユンガ地帯ではサトウキビ、果樹、コムギその他の穀物を作りだした。サトウキビは1549年にはもう作られていたらしく、16世紀後半のワヌコ盆地のサトウキビ畑は広大なものだったと記す文書がいくつもある [VARALLANOS 1959: 271]。また、家畜(牛馬)を飼育しはじめており、牛や馬に畑を荒らされて、棉を作ることもできないと訴えるインディオもいた [VARALLANOS 1959: 272]。一方ハルカからプーナにかけての高いところも、豊かな牧草に目をつけたスペイン人が、インディオからとりあげた土地の多いところであった [VARALLANOS 1959: 291]。

当時のスペイン人が、インディオ社会に伝統的であった垂直統御の原則をどこまで理解していたかは大いに疑問で、インディオたちは、山の斜面のキチュア地帯におしこめられてしまったといつてよい。さらにスペイン人はインディオを強制労働に狩り出した。インカ帝国時代の労働は、互酬と再分配の原理の上に立っていたが、スペインの植民地下において、この原理はほとんど崩壊し、インディオ社会の分解がはやまってゆく。この間の事情は、豊富な事例で、Wachtel がよくまとめている [WACHTEL

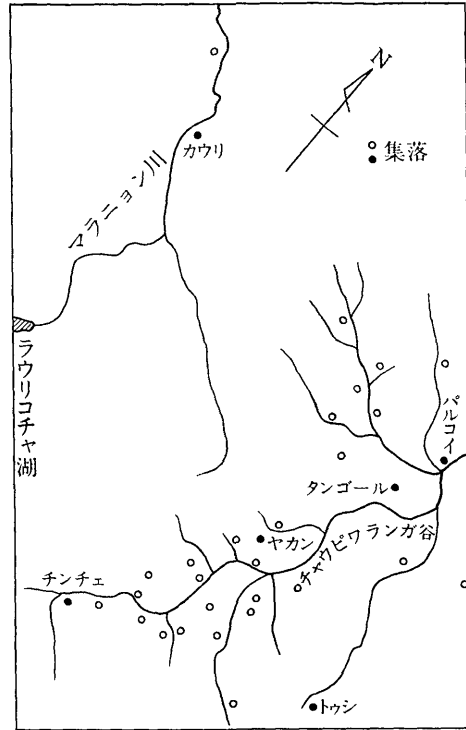


図5 チャウピワランガ谷概念図  
Fonseca Martel [1972: 321] より

1971: 153-209]。

さて、チャウピワランガのその後については、よくわかっていないが、ハルカに位置しているカウリ (Cauri) 村の1900年代前半の様相をみるに、直接的な垂直統御にかわって、交換のシステムが重要になっていったと思われる。

カウリ村は、マラニョン川源頭の高地にある。かつてはチャウピワランガ谷のキチュワ地帯の斜面にも畑をもち、トウモロコシを作っていた。人びとはマラニョンとワリャガの分水嶺を越えて、この畑に耕作に通った。垂直統御のシステムの変化(縮小)とともに、スペイン人の牧場経営にまきこまれたカウリの人びとは、家畜飼育(牛、ヒツジ、ロバ、ラバ、馬)に専念するようになった [FONSECA MARTEL 1972]。

こうして、カウリ村と、チャウピワランガ谷とのあいだには、交換のシステムが成立していった。カウリからは、羊毛、肉、チーズ、乾肉、ブタ、チューニョ(冷凍乾燥ジャガイモ)を下方の村々に提供し、また下方の人びとの所有する家畜の世話をした。それと交換に下方からは、カンチャ(表4のJalca-jaraでとれる色つきのトウモロコシ。炒って食べる)、モテ(白トウモロコシ。ゆでて食べる)、コムギ、ソラマメ、カボチャ、チチャ(トウモロコシの酒)などを提供した。

交換のレートや相手は、1960年代においては、すでにながい伝統として、きまっていた。交換当事者たちは、宿舎と食事を提供しあう親密な間柄として代々つづいており、その関係はヤワシナクイ(yawasinacuy)とよばれる。交換のレートについては、1965年当時、ヒツジ1頭に対しトウモロコシ1袋であった。もしこれをワヌコなどの町の市場で売れば、ヒツジは350ソーレス、トウモロコシ1袋は200ソーレスの値段がついた。したがって、カウリの人にとっては、ヒツジを売ってトウモロコシを買えば、150ソーレスの儲けが出る計算である。しかし、人びとはそれをせず、貨幣計算の上では不均衡な交換をつづける。

その理由は、ヤワシナクイをはじめ、物々交換をする間柄が、単にヒツジとトウモロコシの交換にとどまらず、さまざまな相互扶助を保証する関係になっている、という点にある。それら相互扶助には諸範疇があって、tipinakuy, wachaka, gormay, など、いろいろな名称で区別され、それぞれに、提供する物やサービスと受け取る物やサービスの内容とレートがきまっている [FONSECA MARTEL 1972: 330]。そしてこれらの互酬の関係により、カウリの人びとは下方からの産物の入手が、また下方の人びとは家畜の入手が、つねに保証されているのである。この保証は極めて重要で、天候不順などでどこかの畑が凶作になっても、べつの土地(高いところあるいは低いところ)の産物が分けてもらえるのである。これについての具体的な事例は、チャウ

ピワランガ谷のタンゴール (Tangor) での1970年の調査で採録されている [MAYER 1971]。それにも明らかなように、この互酬的交換のシステムでは、交換の申し出を拒否することができない。たとえ少しでも、何かを分与しなければならない。それが、危急のときの食料を、相手側から入手できる保証となっているのである。と同時に、そうであれば、ある種の物資の生産を専業として生きてゆく道も開けるわけである。

たとえばワイリャイ (Huayllai) 村は海拔3,900~4,500メートルの土地を利用して、リャマとヒツジを飼い、年に8回土器を作る。そして、ワリャガ川上流の谷間へ産物と土器をもって下りてくる。なじみの家をつぎつぎにまわり、土器を置いてゆき、帰りにジャガイモ、トウモロコシなどを一定の比率にしたがってもらって帰るのである [FONSECA MARTEL 1972: 331]。また、あまり役に立つものでもない小さな土器を贈ると、1日1回の食事がもらえる。

専業として交易を選ぶ村も生じた。それはトゥシ (Tusi) の人びとである。近くにたまたま鉱山ができたが、鉱山では肉や農産物をほしがった。トゥシの人びとは、伝統的な交換システムを利用して、肉や農産物を周辺の村々から集め、それを鉱山に売った。やがてトゥシの人びとは、交換網を拡大してゆき、鉱山の需要に応えるとともに、交易商人化してゆく方向に進み、鉱山が自動車や鉄道によって直接都会から物資を調達するようになると、人びとは都市の工業製品を山間のインディオやアマゾン川上流の森林地帯にまで運ぶ行商人へと変ぼうしたのである [FONSECA MARTEL 1972: 336]。

## 6. 問題と考察

### (1) 垂直統御の古さ

アンデス高地において、伝統的生活様式が密接なかかわりをもった自然環境は、海拔5,000メートル以上の高所から、1,000メートルぐらいの谷間まで、段階的に分布する。プーナ、ハルカ、キチュワ、ユンガの自然区分帯 (生態学的ゾーン) と、アンデス東斜面やや下方の熱帯雨林上部 (一般にモンターニャ *montaña* とよばれる) であった。そのような高低の差の大きいところでは、高低の差に応じて自然資源の差異も大きい。アンデス高地の伝統的生活様式は、自然資源の高低差をできるだけひろく利用する方向で作りあげられてきた。その方向は、アンデス高地の生活の基本的特徴といてよく、それは Murra によって、「生態学的ゾーンの差異を最大限に利用する

垂直統御」[MURRA 1972]とよばれ、WEBSTERによって「マルチゾーン・エコロジー」あるいは「多様な生態学的ゾーンの複合開発」とよばれた[WEBSTER 1971]。そして、それは、少なくとも15世紀から16世紀にかけてのインカ帝国時代にはすでに確立していた環境利用の原則であり、その後現代まで、いろいろな形で基本的には存続していることが、いくつかの研究で指摘されたわけである。

そのような環境利用の形態が、いつ頃はじまったのか。山間の谷間と高原とのあいだを、あるいは高原と海岸地帯の冬期の草地(ローマス lomas)とのあいだを、季節的に移動する生活は、すでに6000年から8000年以上も前から存在したことは、よくいわれる通りである[LYNCH 1971; 大貫 1977]。似たようなことは、海岸地帯の先土器時代でもみとめられるという[LANNING 1963, 1965; PATTERSON 1971]。

紀元前2000年紀のワヌコ盆地のコトシュ(Kotosh)では、海拔1,950メートルの暖かいユンガの谷底にあって、高原産のシカの骨が相当量出土しており、紀元前1000年以後になると、ラクダ科動物の骨が大量に出土し、シカの骨が急速に減少する。しかも、コトシュで出土した動物の骨のなかでは、シカとラクダ科のものが全体の80パーセント以上を占める[WING 1972]。これらの骨として出土する動物を、コトシュの人びとが自ら山に登って捕獲したのか、それとも交換で入手したのか、判断できる十分なデータは揃っていない。しかしいづれにしろ、人びとが、ひとつの生態学的ゾーンのなかで自己充足を果たしていなかったことだけは確かである。

農耕確立以後のアンデス高地の先史時代について、環境利用の基本的性格は不明である。多くの研究者は、アンデス高地では、山間の谷間や斜面が利用されたと述べるだけであった。Lumbrerasの近著においては、Murraの考え方が紹介されているものの、インカ帝国以前には、積極的な適用が行われていない[LUMBRERAS 1974]。

筆者は、かつて、形成期までの農耕民は主としてユンガ地帯を開発し、広大なキチュワ地帯の斜面の利用は、古典期からはじまるという考えを発表したことがある[大貫 1967]。先にも述べたように、ユンガ地帯に拠ったとはいえ、高原の動物をかなり大量に入手していたのであるから、遺跡の所在地は、必ずしもその近接地だけの利用を意味するものではない。しかしながら、キチュワ地帯に本拠地をもつ場合は、ユンガとプーナの両方への接近を容易にし、両方のゾーンを管理するのに都合がよくなる。16世紀のチュパチュ族やヤチャ族も、集落の分布するところは、キチュア地帯であった。Brushのウチュクマルカの場合も、上端と下端へほぼ等距離のところに、集落を構えている。こうしてみると、16世紀から現代までにみとめられる垂直統御の基本的な形は、古典期に確立されたものではないか、という見通しを、ひとまず立てら

れるであろう。

## (2) 垂直統御の一般性と特殊性

すでに前段で紹介したいくつかの事例に明らかのように、上下方向に分布する多様な環境区分を複合的に利用するという垂直統御には、いろいろな具体的な形がある。Brush は圧縮型、列島型、拡散型と3類型を抽出したわけであるが [BRUSH 1974, 1977], 筆者はこれに專業型 (Specialized type) を加えられないかと考える。それは、ワリとリャクワス、ヤロとチャウピワランガ (ヤチャ)、トゥシとチャウピワランガ以外の村、などの例に見るように、異なるエスニック・グループが、それぞれ異なる環境を、いわば專業的に開発し、産物を交換しあうタイプである。拡散型においても、異なる環境の産物を交換することはみられるが、それはひとつの谷を占める同一エスニック・グループ間で成立するものであろうから、專業型とはちがうものである。

さて、いろいろな形をこのように類型としてまとめてみると、それぞれがその土地の自然的文化的条件や歴史的条件によって作り出されていることが、容易に推察できる。したがって、ある類型から他の類型へと、変化することもありうる。ケーロの場合は、ほとんど変化することなく現代にまで至ったといえそうだが、チャウピワランガでは、列島型が拡散型あるいは專業型に変化してゆく側面がみられそうであり、北高地南部では、ワリとリャクワスのように、專業型が圧縮型に転じた過程をみてとることができよう。

ところで、このような垂直統御とその諸類型をもってして、アンデス高地のユニークさといえるのだろうか。周囲の環境が多様であれば、それを複合的に開発する生業は、一般にどこでも組み立てられていくものではないのか。夏に山上の草地に家畜を放ち、下方で畑を作り、冬には家畜を下に連れかえる形で、農業と牧畜を組み合わせた生業形態は、ヨーロッパとか、西南アジア、そしてヒマラヤ山地などでもみとめられる。オセアニアの島々では、海、海岸、内陸の谷間、そして山と、いろいろな場所での自然資源を活用する形で生業体系を組み立てている。アンデス高地の垂直統御も、それら諸地方の場合と、基本的に異なるところはなく、アンデス高地の自然条件に対する、もっとも当然な適応である。強いてアンデスに特有なものといえば、比較的規模の大きい列島型しかない。

先にあげた諸類型について、相互の関係を考えてみると、つぎのようなことがいえる。すなわち、アンデス高地では、世帯ごとに自給自足できる経済を営もうとして、圧縮型の環境開発が基本にあった。その例に近いものがケーロである。何らかの事情

で世帯単位の自給ができない場合は、コミュニティ単位あるいはエスニック・グループ単位の自給自足が求められ、そこに圧縮型（ウチュクマルカ）、列島型（ルパカ族）、拡散型の諸類型が成立する。どの形をとるかは、それぞれの地方、民族、集落などの地方的事情による。さらにそれすら不可能な場合、異なる環境を異民族が住み分け、相互に交換を行う專業型がとられる。

そこで問題は、いかなる事情によって、世帯単位の自給自足体制が崩れるのか、その場合ある特定の類型を採用するのはいかなる理由によってか、という点を明らかにすることである。これまでの諸研究は、まだこの問題に取り組んでいない。アンデス高地の事例をもっと増やすことがまず必要であるが、今指摘した問題を念頭に置いた事例研究が望まれるのである。

それと同時に、もうひとつ重要な問題がある。先にあげたいくつかの類型にみられるように、アンデス高地の環境利用の形はいろいろある。その個々の成立事情を明らかにすることは、事例研究の義務である。と同時に、個々の類型あるいは個々の社会の環境利用が、その社会および文化の諸様相にどのようなかわりをもっているのか、その点が果たして明らかになるかどうか、である。そしてさらに、それが、アンデス高地の諸文化を、アンデス的たらしめている要因につながるものなのかどうか。そういう問題が追求されねばならないであろう。

### (3) 垂直統御の背景

今指摘した問題と関連する点を、ひとつだけ論じてみたい。いくつもの生態学的ゾーンを開発するのは、ひとつのゾーン（自然区分帯）だけでは自給自足できないからか。少なくとも食料に関する限り、必ずしもそうとはいえない。プーナでは、家畜を飼い、少し低いところでジャガイモやキノアを栽培すれば、生活は成り立つであろう。キチュワやユンガでは、農産物は豊富である。これに、低地に強いリヤマヤ、家屋内で繁殖の旺盛なクイ（テンジクネズミ）を飼えば、動物性食料も不足とはいえないであろう。

しかしながら、アンデス高地の人びとはそうしなかった。それは、単に食料や生活材の内容を豊富にするという経済的要因のほかに、儀礼とのかかわりという要因があるためではないのか。

高地の人びとにとって、肉、ジャガイモ、トウモロコシは、儀礼の際の必需品である。さらにこれに、暖地産のコカの葉も加えてよかろう。儀礼の主催者は、酒と食事、ときにはいけにえ用の動物、を用意するが、酒は本来トウモロコシから作るチチャで

なければならず、食事は特別の御馳走であるから肉が入っていなければならず、ジャガイモは食事の量を多くするのに都合がよい。トウモロコシが儀礼用の酒を作るために、不可欠の重要性をもっていたことは、Murra の主張でもある [MURRA 1960]。

かくして、高地の人びとにとって、日常の食生活以外に、儀礼の面で、高いところから低いところまでの特産物を、いろいろととり揃える必要がどうしてもあったのである。このような価値志向の根は、古い先史時代にさかのぼるにちがいない、現代インディオにもひきつがれているのかもしれない。

それとも関連するが、山一村一谷という高低の位置関係ならびにその間の移動が、人びとの世界観あるいは象徴体系と、何か結びついていないかという問題も、検討されてよい。人びとにとって、高いところにあるプーナとは何を意味しているのか、反対に谷に下るといふ行為は何を意味しているのか、いろいろな地形と、そこへ到達する行為が、何かシンボリックな意味をもっているはずである。天上の神の居る場所までの道程と、現実の生活の場としての地形の特徴とが、みごとに重なりあっているという民族誌的事例も、アヤクチョ (Ayacucho) 地方から報告されている [ZUIDEMA and QUISPE 1968]。

アンデス高地の垂直統御は、世界観あるいはシンボル体系に裏打ちされた経済行為というべきで、生物学的生存だけに理由を求めべきものではない。垂直統御の形態では、さまざまな地方的多様性があらわれても、文化的には長い時間にわたって、アンデスの共通性がみとめられる。そのような共通性を生む理由のひとつに、シンボル体系の基本的共通性があるのかもしれない。今後、関心を寄せたい問題である<sup>2)</sup>。

## 追記

本稿は、国立民族学博物館の「新大陸の文化変容」に関する共同研究会（代表者大給近達、昭和52年度）での研究発表を骨子として、同研究会の共同研究員諸氏の貴重な示唆により、加筆あるいは修正をしまとめたものである。かくも内容豊かな共同研究会への参加の機会を与えられたこと、および研究員諸氏から多くの教示を受けられたこと、に対し、末尾ながら、謝意を表す次第である。

なお、同研究会のなかから実態調査の計画が生まれ、昭和53年度において、ペルーの調査が行われたことも付記したい。そして、ペルーに行ってみて、本論のテーマに関する研究は、さらに進められていることもわかり、また、筆者の観察データも若干増えた。それらを含めて、近い将来、再び、アンデス高地の環境利用を考察してみる予定である。

---

2) このような研究方向は、すでに友枝によって進められはじめている [友枝 1978]。



文 献

- BRUSH, Stephen B.  
 1974 El lugar del hombre en el ecosistema andino. *Revista del Museo Nacional* 40: 277-299, Lima.  
 1977 *Mountain, Field, and Family: The Economy and Human Ecology of an Andean Valley*. University of Pennsylvania Press.
- DUVIOLS, Pierre  
 1973 Huari y Llacuaz. *Revista del Museo Nacional* 39: 153-191, Lima.
- FONSECA MARTEL, César  
 1972 La economía vertical y la economía de mercado en las comunidades alteñas del Perú. Iñigo Ortiz de Zúñiga (1972), pp. 317-338.
- GUAMAN POMA de Ayala, Felipe  
 1956 *La Nueva Crónica y Buen Gobierno*. Primera parte, Epoca Prehispánica, Editorial Cultura, Ministerio de Educación Pública del Perú.
- LANNING, Edward P.  
 1963 A Preagricultural Occupation on the Central Coast of Peru. *American Antiquity* 28: 360-371, Salt Lake City.  
 1965 Early Man in Peru. *Scientific American* 213: 68-76, New York.
- LUMBRERAS  
 1974 *The People and Cultures of Ancient Peru*. Washington, D. C.: Smithsonian Institution Press.
- LYNCH, Thomas F.  
 1971 Preceramic Transhumance in the Callejon de Huaylas, Peru. *American Antiquity* 36: 139-148, Salt Lake City.
- 増田義郎  
 1967 「後古典期から植民地時代へ——エスノヒストリーの可能性」『ラテン・アメリカ研究』8: 119-154, ラテン・アメリカ協会。
- MAYER, Enrique  
 1971 Un carnero por un saco de papas: aspectos del trueque en la zona de Chaupiwara, Pasco. *Actas y Memorias del XXXIX Congreso Internacional de Americanistas* 3: 184-196, Lima.
- MURRA, John V.  
 1960 Rite and crop in the Inca state. Murra (1975), pp. 45-57.  
 1972 El control vertical de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas. Iñigo Ortiz de Zúñiga (1972), pp. 429-476.  
 1975 *Formaciones económicas y políticas del mundo andino*. Instituto de Estudios Peruanos, Lima.
- 大貫良夫  
 1967 「中央アンデスにおける形成期および古典期後古典期の生態学的背景」『ラテン・アメリカ研究』8: 71-100, ラテン・アメリカ協会。  
 1977 「文明成立前の中央アンデス海岸地帯の先史文化」『江上波夫教授古稀記念論集 考古・美術篇』, 山川出版社, pp. 433-450.
- ORTIZ DE ZÚÑIGA, Iñigo  
 1967 *Visita de la provincia de León de Huánuco (1562)*, Vol. 1, Universidad Nacional Hermilio Valdizán, Huánuco, Peru.
- PATERSON, Thomas C.  
 1971 Central Peru: its population and economy. *Archaeology* 24: 316-321.
- PULGAR VIDAL, Javier  
 1946 *Las ocho regiones naturales del Perú*. Lima.
- 友枝啓泰  
 1978 「セニャル儀礼の増殖表象——中央アンデスの家畜増殖儀礼——」『国立民族学博物館研究報告』3(1): 1-39.

Tosi, Joseph

1960 *Zonas de vida natural en el Perú*. Instituto Inter-Americano de Ciencias Agrícolas de la OEA, Lima.

VARALLANOS, José

1959 *Historia de Huánuco*. Buenos Aires.

WACHTEL, Nathan

1971 *La Vision des Vaincus: Les Indiens du Pérou devant la conquête espagnole, 1530-1570*. Paris.

WEBSTER, Steven

1971 An Indigenous Quechua Community in Exploitation of Multiple Ecological Zones. *Actas y Memorias del XXXIX Congreso Internacional de Americanistas*, 3: 174-183, Lima.

WING, Elizabeth S.

1972 Utilization of Animal Resources in the Peruvian Andes. In Izumi, A. & K. Terada (eds.), *Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*, University of Tokyo Press, pp. 327-351.

山本紀夫

1976 「中央アンデスの凍結乾燥イモ, チューニヨ —加工法, 材料およびその意義について」『季刊人類学』7(2): 169-212, 講談社。

ZUIDEMA, R. T. and U. QUISPE

1968 A Visit to God: The Account and Interpretation of a Religious Experience in the Peruvian Community of Choque-Huarcaya. In D. R. Gross (ed.) (1973), *Peoples and Cultures of Native South America*, The Natural History Press, Garden City, N. Y., pp. 358-374.